信は行為に放たれて

L'acte de foi et/ou une foi en acte

柿並良佑

1. アクト、アクション

今日、哲学の身分は、あるいは「アクチュアリティ」なるものはどのような状況にあるのか。ジャン＝リュック・ナンシーは自覚的にその問いと向き合い続けた哲学者だった。いや、その問いを生きた、と言っておこう[1]。カントによって開かれた道に続いたキルケゴール、マルクス、ニーチェらの名を挙げつつ、ナンシーは思考というものを感覚的な形態の下に提示しようとし続けた。それ自体が実践的となっている理論ないし理性、それを彼は「プラクシス」と呼び、自らの哲学をもって証示することをやめなかった。晩年、書物の形で遺された対談の一つでは端的に言われている。「ですから、哲学はみずからが行為であり世界の変革たらんとしているのです」[2]。

実際、最初期の仕事からして、「行為 acte」という概念がナンシーの哲学の重要な点、むしろ核心そのものをなしていたと言うことすらできよう。思考を現動的（アクチュアル）なもの、感覚的なものにし、動員し、揺さぶること。要するに思考を「現動的＝行為の状態に en acte」することが、彼の思想そのものをはっきりと浮かび上がらせている。その旅程に随伴した思想家は少なくない。カント、ヘーゲル、キルケゴール、あるいはバタイユ……。言い換えれば、ナンシー自身がそのようにして哲学の伝統を読み直し、解釈し直し、再活性化しているのだ。ときに「思行為 un acte de pensée」が「性行為 un acte sexuel」と併置されることもあったほどに[3]。

> たしかにこう主張しなければならない。少なくとも束の間、愛と隣り合わせにならないようであれば性行為も思行為もないのだと。たとえ、そうした行為がまるごと愛へと拉し去られてしまわぬ時でも。愛、言い換えれば、関係を持つことのできないものとの関係へ連れてゆかれぬ時でも。

---

[1] 本稿は以下の国際シンポジウムで発表された内容を元にしている。International Conference, "Thinking with Jean-Luc Nancy", Balliol College – University of Oxford, 29th and 30th March 2019. 拙発表を聴講したナンシーは、コーヒーブレイクの際に「君の発表が閉会の辞のアイディアをくれたぞ」と言い、シンポジウム全体が一つの acte であったと宣言してクロージング・スピーチを始めたのだった。« L'acte est un morceau de l'action » ――ブレイク時、そう口にしていたナンシーと公的な場では最後に話した時の思い出としてここに採録するため、動詞の多くがそうであった現在時制を過去時制に改めるのもまた、喪の作業の一環をなしているのかもしれない。

[2] *La possibilité d'un monde*, dialogue avec Pierre-Philippe Jandin, Les petits Platons, 2013, p. 25.

[3] *La pensée dérobée*, Galilée, 2001, p. 13. ただし、この著作では「現前の属性」としての「現実性 l'actualité」が「裸の現前」の観点から拒否されてはいる（*ibid*., p. 17）。

「関係なき関係 rapport sans rapport」――『政治的パニック』が書かれた 1970 年代から用いられた表現――はナンシーの思考の核心部にあり、「共同体なき共同性」、「分割＝共有」、「内越 transimmanence」、「～への存在 être à」、あるいは「崇拝＝熱望 adoration」等々の名でも呼ばれていくことになる。

あるいはまた「絶対的なものとの絶対的な関係 un rapport absolu avec l'absolu」。キルケゴールの『おそれとおののき』から採られた表現は[4]、デンマークの哲人に言い及ぶ『アドラシオン』に付された注の一つを想起させる。そこでナンシーが強調する「無限への情熱」[5]は、世界のただ中に開かれた外部を指し示していよう。再読を慫慂される『哲学的断片への結びの学問外れな後書』では、「絶対的テロスへの絶対的な情熱的関係」[6]が実存の根本的構造として把握される。すなわち、そこでは「絶対的にあらゆる事を敢行し、絶対的に全てを賭し、絶対的に最高のテロスを欲する、ということが必要」となりながら、「絶対的な情熱と全ての他のものの断念ですらも、永遠の浄福に値しそれを得るという外見を持たない」ことが重要となる。

絶対的なもの、有限と無限、情熱、実存、そしてまた単独性・特異性といった観念をめぐって

---

[4] 以下のシンポジウムでの発表のタイトルに採用された。Colloque à l'occasion du bicentenaire de la naissance de Søren Kierkegaard (1813-1855) – Lectures francophones, le 28 septembre 2013.　2022 年 1 月現在、Web などでは公開されていないが、記録映像がフランス国立図書館の情報端末で視聴できる。ナンシーの講演冒頭ではキルケゴールとの最初の出会いが語られており、ジョルジュ・モレルによるヘーゲルの手ほどきの内に、じつはキルケゴールが入り込んでいたのだろう、と彼は往時を振り返っている。さらに、ストラスブール大学での同僚にはキルケゴール研究の泰斗ヴェルゴート（Henri-Bernard Vergote, 1931-1996）がおり、そこまで親しかったわけではないようだが、哲学について職場で語ることが決して多いとは言えない環境にありながら、キルケゴールについて語ることがしばしばあったという。かくしてナンシーはキルケゴールの内に「哲学に対する一種の異物」、しかしながらソクラテスの態度のように哲学を先鋭化させるものを見て取った。

この講演では表題に掲げられた表現は『おそれとおののき』でのそれを念頭においたものであった（『キェルケゴール著作全集』創言社、第 3 巻（上）、2010 年、79 頁）。ナンシーは「絶対的な関係」が決して一つの実体としては捉えられず、あらかじめ対象化された「何か」への関係ではなく、切り離されたもの（ab-solutum）という意味での関係を主題として取り上げている。ゆえにラカン論『性関係の「ある」』での関係をめぐる議論も援用された上で、「絶対的な関係」は「絶対的なものが自分自身に関係すること（se rapporter à lui-même）」として、さらには「自らを顕わにすること（se présenter）」として捉え直され、まさに『おそれとおののき』でのアブラハムがその体現者と考えられることになる。

このキルケゴール論はしかし断片的な性格ゆえに、その後本人の手による改訂を断念され、代わりとなるインタビューがシンポジウムの論集に収録された。Cf. « En chute libre à l'infini », Florian Forestier, Jacques Message et Anna Svenbro (dir.), *Kierkegaard en France. Incidences et résonances*, Bibliothèque nationale de France, 2016. 「キルケゴール――ジャン=リュック・ナンシーへの問い」伊藤潤一郎訳、『人文学報』首都大学東京、第 513-15 号、2017 年参照。

[5] *L'adoration (Déconstruction du christianisme, 2)*, Galilée, 2010, p. 44. 『アドラシオン』メランベルジェ眞紀訳、新評論、2014 年、237 頁。

[6] 『哲学的断片への結びの学問外れな後書（後半）』大谷長訳、『キェルケゴール著作全集』創言社、第 7 巻、1989 年、148 頁。

問うべきことは多々あるものの、ここでキルケゴールとナンシーの関係をさらに探求することはできない[7]。今は目下の主題に直接向かうことにしよう。ただし、変わらず「キリスト教の脱構築」という展望の下、マイスター・エックハルトやバタイユといった無 - 無神論者たちに並び[8]、キルケゴールがある面では先駆者の一人であった思考の軌跡を辿りつつ。

さて、思考の動因／動員となる（あるいは思考そのものである）態度ないし身振りに「現動態にある信 foi *en acte*」という表現を充ててみよう。すぐにお分かりのことと思うが、これは伝統的かつ宗教的な表現を転倒させたところから得られたものだ。「信仰表明 acte de foi」とは、信徒が自らの信を肯定する際の祈りを指している[9]。

現代世界において信をめぐる状況はどのようなものだろうか。「信仰表明／信の行い」という表現が姿を見せる『脱閉域』の冒頭では、キリスト教の解体・脱構築の時代、あるいはまた宗教の保証と正当性の喪失が描かれる。さらに、我々が生きている環境では「信仰表明に生気を与え活気づけていたものが、ドグマ的で制度的な統制としてしか現れない」[10]。現代（モデルニテ）、すなわち第二ヴァチカン公会議（1962-1965 年）以後の世界に対して注がれるこうしたまなざしは、ナンシーの経歴のごく初期にも認められる。1960 年代に雑誌『エスプリ』に寄稿された 5 本の論考の中に「継続要理教室」と題されたものがあり、そこでは同時代におけるキリスト教の意義が厳しく問われていた[11]。少々迂回してこの論考に触れておこう。

2. 「キリスト教」から離れて

論考「継続要理教室」は『エスプリ』誌の「新たな世界と神の言葉」と題された特集号に寄せられたもので、第二ヴァチカン公会議後の社会における教義と実践の乖離から説き起こし、ナンシー自身が「そこに所属していると思っている教会」といかにして「離別」することになったかが語られる[12]。教会教義の対抗勢力であるマルクス主義、実証主義、無神論的人間主義が、実際には

---

[7] 手がかりとして以下の拙論を参照されたい。「有限者の試練――キルケゴールとナンシー」、『現代思想』青土社、2014 年 2 月号。

[8] 以下を参照。« A-athéisme », *L'ENA hors les murs*, nº 353, juillet 2005. 「無 - 無神論」西山達也訳、『水声通信』水声社、第 10 号、2006 年 8 月。

[9] 信仰表明の文言には変遷があるが、ナンシーがカトリックの教理を学び始めた時代のバージョン（1947 年）には以下のようにある。「我が神よ、あなたが私たちに明かされ、あなたの教会を通じて教えているすべての真理を私は固く信じます。なぜならあなたはご自身を欺くことも私たちを欺くこともできないからです」（« Mon Dieu, je crois fermement toutes les vérités que vous nous avez révélées et que vous nous enseignez par votre Église, parce que vous ne pouvez ni vous tromper ni nous tromper. »）。 Cf. Gilbert Adler et Gérard Vogeleisen, *Un siècle de catéchèse en France. 1893-1980*, Beauchesne, 1981, p. 62.

[10] *La déclosion (Déconstruction du christianisme, 1)*, Galilée, 2005, p. 10. 『キリスト教の脱構築 1 ――脱閉域』大西雅一郎訳、現代企画室、2009 年、11 頁。ある箇所でキルケゴールは信については体系が存在しないと述べていた。

[11] 「上級公教要理」とも訳される。 Jean-Luc Nancy, « Catéchisme de persévérance », *Esprit*, nº 364, octobre 1967, p. 368-381.

[12] « Catéchisme de persévérance », *art. cit*., p. 369.

キリスト教文明の継承者にほかならず、それらが息切れしていく中で当のキリスト教自体も論戦から離脱していき、もはや「世界観 vision du monde」を、すなわち歴史と世界を説明しうる神学的で形而上学的な「体系」を提示することができなくなっていく。「世界観」の不在、文字どおり世界を観るための方途を失った現状に対処する武器をキリスト教は失った。このようにナンシーは「自分たちと教会との離別」[13]を説明する。

一方では今日キリスト教が「世界把握 conception du monde」の一つに過ぎず、しかし実は世界はなくただ「新しいもの」――公会議で議論された「新たな世界」とは別の意味での新たな何か――、「未知のもの」に自分たちが直面していることが指摘される。他方で、硬直し「閉じた」キリスト教と「開かれた」キリスト教という区別にみられる「疑似ベルクソン哲学」の陥穽をも避けながら、ナンシーは自身の置かれた状況を語ろうとしている。そこに援用された語が論考のタイトルにもなっている「堅忍 persévérance」であった。通常、動詞 persévérer は根気よく続けること、固執すること、神学的には固く信仰を守ることを意味する。しかし無関心や恥の意識といった多様で曖昧な状況をすべて汲んで、ナンシーは「我々は皆、ただ堅忍する者 persévérants である」[14]と述べる。もはや世界の征服者ではなく、その修繕役、調整役でしかない「我々」の現況がさしあたりこの言葉に託された。キリスト教が歴史において犯してきた過ちや罪に対して目を閉ざすことなく振り返りつつ、その歴史に閉じ込められた「神の言葉」をいかに考えるべきか……、その後、「キリスト教の脱構築」に収斂していく仕事との詳細な対比は別の機会に譲ろう。ともあれ、先の「閉じた／開かれた」という区別、およびそれにまつわる諸種の弁別指標を取り上げてナンシーは言う。

> こうした区別には信徒への教訓的勧善にあたって効果はあれど、それら区別の理論的脆弱性を忘れることはできない。宗教のない信はない。祭儀のない崇拝はない［Il n’est pas d’adoration sans culte］。祭儀は刷新され、簡略なものになっても祭儀のままだ。問題は本質であって、ニュアンスではない。表明されない信はない［Il n’est pas de foi qui ne s’exprime］。キリスト教は、我々の知る（あるいはもはや知らぬ）唯一の信の表明である。[15]

後年、先にも引いたジャンダンとの対談でナンシーが「継続・固執する persévérer」という動詞に注意を喚起しているのは些細なことではないように思われる。「あらゆる制度上の必要性を超えて、おそらく教会への帰属すらも超えて、踏みとどまり固執しなければならない何かがあったのです」[16]。制度としての宗教が失効した後でなお、世界を、文明を、そして信を考えることはいか

---

[13] *Ibid*., p. 371.

[14] *Ibid*., p. 373. ナンシー自身が直後に付記しているように、この語は「初聖体拝領の後も公教要理に通い続ける人を指して言われた」。「公教要理（カテキズム）」は信仰を伝授する教理入門教育を指す。Cf. *La possibilité d’un monde*, *op. cit*., p. 18-19.

[15] « Catéchisme de persévérance », *art. cit*., p. 372.

[16] *La possibilité d’un monde*, *op. cit*., p. 19. 同箇所では、「堅信（Confirmation）」を受け、準備としてのカ

にして可能なのか？

およそ 30 年を経た 1995 年、「キリスト教の脱構築」と銘打たれた講演で、ナンシーは信の観念、このすぐれて「キリスト教的なカテゴリ」に立ち戻る[17]。信はまず、「神とその愛が現にそこに現前しない限りにおいて、神に、あるいは神の名に関係づけられること」であり、より哲学的な語をもってすれば「純粋な志向性」とも考えられている。こうした信は彼のテクストの随所で信仰（croyance）とは峻別される[18]。信仰は欠如（manque）の論理、何か欠けているものの待望を特徴とするというわけだ[19]。だが今ここでなされる行為 - 祈りとしての信にはもはやそのような不在の対象はない。

だが相関項のない信に何かが残っているとすれば、何ものかの欠如から解き放たれた信になお残存しているものがあるとすれば、それは一体何か？　誠実さ、である。

> たしかに信とは固有化できない無限の意味が現動態にあること［l'être-en-acte］であり、また、誠実さとしての信が漸進的に、何でもないものへの誠実さ、誰に対するものでもない誠実さ、**誠実さそのものへの誠実さ**になっていくというのも本当です。［……］私たちは何に対して誠実なのか？［……］誠実さの身振りそのものに誠実なのです。[20]

「宗教も信仰も」ない時代にすら残存するこうした誠実さを、ナンシーはジェラール・グラネルに倣い、「思考する誠実さ」、あるいはまた「全体の無［何でもないこと］への信」[21]と呼ぶ。ま

テキズムを必要としなくなった信徒が信仰箇条についての理解を深めるために受けるのが「継続要理教室」だと説明されているが、初期の論考で言われていたとおり、聖体拝領後と解されるのが通常のようである。

[17] *La déclosion*, *op. cit*., p. 220 *sq*.　『脱閉域』、前掲書、300 頁以下。

[18] Cf. *La déclosion*, *op. cit*., p. 78. 『脱閉域』、前掲書、100 頁。この区別は生涯にわたって維持された。Cf. Jean-Luc Nancy, *La vérité du mensonge*, Bayard, 2021, p. 27.

[19] *La déclosion*, *op. cit*., p. 221. 『脱閉域』、前掲書、302 頁。

[20] *La déclosion*, *op. cit*., p. 223. 『脱閉域』、前掲書、304 頁。初出時、「誠実さそのものへの誠実さ *fidélité à la fidélité même*」は全体にイタリック強調が施されていたが、論集再録時に même の強調が脱落した。Cf. « La déconstruction du christianisme », *Études philosophiques*, PUF, nº 4, 1998, p. 517.

最も日常的で平凡な誠実さの身振りと言えば「お得意様カード la carte de fidélité」だろう。その他の哲学的・宗教的概念同様、誠実さもまた資本主義の内にあり、「マネタイズ」されうる。

[21] *La déclosion*, *op. cit*., p. 104. 『脱閉域』、前掲書、137-138 頁。誠実さへの誠実さ、関係そのものへの関係、変わらずキルケゴール的モティーフと呼ぶべきだろうか。講演「絶対的なものへの絶対的な関係」では、絶対的関係が「自己自身へと関係づけられること」、さらには「自らを現前させること」として理解され、『おそれとおののき』でのアブラハムはその具現化であった。そしてまたナンシーはキルケゴールの内に信の逆説を見ていた。「絶対的なものは、絶対的なものに対してしか決して絶対的なものたりえない」のだとすれば、「話す者はその語りが名付けている絶対的なものに成る」、すなわち「一切の関係から切り離される」必要があるが、これは耐え難い逆説だという。「時間から切り離された瞬間」すなわち信と共に生じるのは同じ逆説であって、その信は「逆説の核心に立つ行為に他ならない」。Cf. Jean-Luc Nancy, « Un mot d'accompagnement », Søren Gosvig Olesen, *Avec Kierkegaard. La philosophie dans le texte*, Mimésis, 2017, p. 10. 「キルケゴール」、『人文学報』、前掲論文、23 頁。

さしくここに、少なくとも形式的には、思考の行為の可能性が開かれる。一見奇妙にも映る図式、すなわち**穿たれた信**と**退引せる神**という対称性に支えられた可能性が[22]。信の対象の不在と神の不在――神的なものの残り香を漂わせる不在へのある種の「固執・堅忍」が今日の信を成立させているかのようではある。

3. 行為・現動態・現実化

いささか速く進みすぎたようだ。テクストに書き込まれた「現動態にある信」という表現に戻ろう。ナンシーは「信者一人ひとりが心の中で発しうる信の**行い**［信仰の祈り l'*acte* de foi］」[23]を分析するのではなく、個人的な実践とは異なった行為の観念を取り上げる。すなわち「現動態にある・行為の内にある en-acte」という観念を用いて誠実さの構造を説明する。自らを委ねるという行為の内にある信は次のように解される。

> この現動態にある信は神学者によって *fides qua creditur* と呼ばれますが、この「それにより人が信じる信 foi par laquelle on croit」は信者の信の公言・表明として、内容としての信、すなわち *fides quae creditur*、信じられている信、神の言葉の意味を現動化するのです。言い換えれば、真の行為、すなわち *fides quae creditur* の完成態（エンテレケイア）は *fides qua creditur* です。行為が意味を現動化（アクチュアル）するわけなのです。[24]

すぐさまその脱構築が発動するだろう。主体である信徒の心臓部、その内奥で。ナンシーが好んで引いた格言に従うなら *interior intimo meo*、内奥よりも奥深いところで……[25]。

ここで少し目下の文脈を離れ、現動態／潜勢態 acte / puissance という対、およびそれに基づく現動化 actualisation という概念の正当性を確認しておこう。これらの概念は『キリスト教の脱構築』に先立つ自由の思考をめぐる仕事の中で問いに付されていた。たしかにナンシーは述べている。「自由の政治的な行為は現動態にある自由（平等、兄弟愛、正義）**である**のであって、自由という統制的理想の目標（ねらい）ではない」[26]。ところでこの「行為」ないし現実態（エネルゲイア）は潜勢態（デュナミス）を想定しているの

---

[22] Cf. *La déclosion*, *op. cit*., p. 56. 『脱閉域』、前掲書、71 頁。また次の濃密な定式を参照。「いかなる神にも似ていない、贈与としての「神」「それ自体」、自らを他なるものへと与え、何ものをも信仰しない［ne croit à rien］信の贈与としての「神」「それ自体」」（*ibid*., p. 80：同書、104 頁）。

[23] *La Déclosion*, *op. cit*., p. 220. 『脱閉域』、前掲書、300 頁。だが後でみるように、ナンシーは少なくとも宗教的な信についても語っている。「ヤコブの言う信は、その行為が、当の行為をめぐるあらゆる概念に合致しないようにして実行される」（*ibid*., p. 79：同書、103 頁）。

[24] *La Déclosion*, *op. cit*., p. 222. 『脱閉域』、前掲書、303 頁。同箇所では「自らを委ねる se remettre, s'en remettre」と言われているが、別の箇所では se fier, se confier という動詞が用いられていた（*ibid*., p. 79：同書、102 頁）。この動詞と foi、さらに confiance や fiançailles といった語の関連をめぐる語源的考察は、子どもたちに語りかけた最晩年の講演でもなされていた。Cf. *La vérité du mensonge*, *op. cit*., p. 29.

[25] 『脱閉域』ではこの格言は一度、ハイデガーとアウグスティヌスを接近させる箇所にのみ記されている。*La Déclosion*, *op. cit*., p. 162. 『脱閉域』、前掲書、217 頁。

[26] Jean-Luc Nancy, *L'expérience de la liberté*, Galilée, 1988, p. 103. 『自由の経験』澤田直訳、未來社、2000

だろうか。

答えは否、だ。少なくともこの「自由論 éleuthérologie」[27]においては。実存の実効性 effectivité、およびその決断は「可能態に［*in potentia*］ありえたであろうものを、現実態において［*in actu*］実行すること［effectuer］に帰されるのではない」[28]。ただし、このことは単に潜勢態／潜勢力に対する現実態／行為の優越の謂ではあるまい。その概念対は直接にはそう名指されることなく脱構築されてゆくことになる。

> 現実態にある思考［la pensée en acte］は常に、次の二つの究極的な可能性の間で宙吊りの状態に（そう言いたければ、「潜勢態に［en puissance］」）ある。すなわち、「それを言うための言葉が**欠けている**」と「**それを言うためではなく**、なすための言葉が欠けている」という二つの可能性の間だ。[29]

ゆえに次のように言うことができるだろうし、言わねばならないのだろう。思考は現実態にあり**かつ**潜勢態にあるのだと（ただし思考を「力 force」として理解する条件で。力としての puissance である現実態（アクト）／行為（アクト）、行為 - 力としての puissance）。もちろん、言説と身振りの間の「非決断」にまつわるリスク、危険、脅威を承知しておくことは言うまでもない。「思考の行動」と「行動の思考」の間での非決断にいかなる危険があるのかを[30]。

ここでさらに初期の仕事を思い起こそう。『政治的なものを賭け直す』と『政治的なものの退引』では、哲学的なものと政治的なものを一度分離し、その輪郭を引き直すことが、さらには政治的哲学と哲学的政治の共犯関係を明るみに出すことが争点とされており、潜勢態にある理念の現実化（アクチュアル）という論理がそうした結託の基底部にあった[31]。行為（アクト）なるものを手放しで肯定できるほど楽観的にならないために、信の行為／信仰の祈りの変質した姿、あるいは「錯乱」を示しておくことも無駄ではあるまい（全体を読解する余裕はないが、少なくともこの表現が用いられ、ともあれそれが一つの行為とされている点にのみ注意を喚起しておきたい）。

> 哲学と知一般の彼方で、神秘的な認知は *Bekenntnis* というよりは *Erkenntnis*、つまり、認識［connaissance］というよりも「自認［reconnaissance］」、すなわち信仰告白［confession de foi］という意味における告白となる。同様にして、そして哲学に似た対立にしたがって、ヒトラ

年、135 頁。

[27] *L'expérience de la liberté*, *op. cit*., p. 24. 『自由の経験』、前掲書、29 頁。

[28] *L'expérience de la liberté*, *op. cit*., p. 35. 『自由の経験』、前掲書、43 頁。

[29] *L'expérience de la liberté*, *op. cit*., p. 200. 『自由の経験』、前掲書、270 頁。

[30] 変わらずキルケゴールは我々の近くにいるのだろうか。「言われたことは単に言い表されるだけでなく、その言表行為と実体を同じくするのでなければならない。要するに、言うことがすることでなければならないのだ」。« Un mot d'accompagnement », *art. cit*., p. 10. 「キルケゴール」、前掲論文、22 頁。

[31] 例えば以下を参照。Philippe Lacoue-Labarthe et Jean-Luc Nancy (dir.), *Le retrait du politique*, Galilée, 1983, p. 187. 「政治的なものの「退引」」拙訳、『思想』岩波書店、1109 号、2016 年 9 月、13 頁。

> ーは、重要なのは *Glaubensbekcnntnis* を、すなわち信仰の表明ないし行ない［une profession ou un acte de foi］を産み出すことであると宣言している。［……］
> この信仰の行ない［acte de foi］は、それぞれの民族にとって、その固有の神話に、つまりはその同一性の根源的な投影と投企に関わっている（したがって、ゲルマン人にとってはゲルマン的同一性に関わっている）。しかし、この信仰の行ないはまさに一つの行為［un acte］である。つまり、それはただ単に、少なくともこの語の通常の意味における精神的態度のうちにのみ存しているわけではない。神話への「神秘的な」関係は、生きられた経験（*Erlebnis*、当時の重大な概念）の領界に属している。「神話的経験」というものがあり［……］そのことが意味しているのは、神話は**生きられた**のでなければ本物ではないということだ。神話がある実効性をそなえた類型を形成するべきなのと同じく、信仰の行ないは無媒介に、この類型が生きられたもの［le vécu］であるべきなのである。[32]

ヒトラーが目的や理念や世界観の現実化の論理を用いているのは明らかだ。ではどこからその「妄想」ないし「錯乱」[33]が生じてきたのか。おそらくは宗教的なものへの参照、ここではカトリシズムとその「一度決定されたドグマにゆるぎなく固執すること」[34]の援用からだ。

事実、『脱閉域』にもこの論理の批判が散見される。行いの伴わない信（argos、すなわちエルゴンを欠いた信）という聖書のモティーフを読み解きながらナンシーは言う。

> エルゴンはここでは実存のことである。ゆえにそれが意味するのはまた、一般的にエルゴンが産出としてよりもいっそう実効性として理解されること、そして行いがなされること［l'*operari* d'un *opus*］よりもいっそう現動態にあること［l'être-en-acte］として理解されることである。[35]

---

[32] Philippe Lacoue-Labarthe et Jean-Luc Nancy, *Le mythe nazi*, L'Aube, 1991 ; 5e éd. 2016, p. 57-58. 『ナチ神話』守中高明訳、松籟社、2002 年、71-72 頁、下線強調は引用者。ラクー＝ラバルト／ナンシーが示しているように、「自由な魂」（*ibid*., p. 62 : 同書、76 頁）、絶対的主体、自己産出のモデルの導き手としてローゼンベルクが援用するマイスター・エックハルトは、言うまでもなくナンシーの言う「無 - 無神論者」の先達としてのエックハルトではない。「神から自由にしてくれるよう、神に祈ろう」――この祈りの行為（acte de foi ?）はナンシーの口に上るたびに細かな違いを見せることがあるが、精確な文献学的解説は別の機会に譲ろう。

[33] Délire および aberration については以下。Philippe Lacoue-Labarthe et Jean-Luc Nancy, *La panique politique*, Christian Bourgois, 2013, p. 10 ; *Le mythe nazi*, *op. cit*., p. 67. 「政治的パニック」、拙訳、『思想』岩波書店、2013 年 1 月、27 頁 ;『ナチ神話』、前掲書、83 頁。

[34] « [L'Église catholique] a reconnu très justement que sa force de résistance ne réside pas […] mais dans son attachement inébranlable à des dogmes établis une fois pour toutes, et qui seuls confèrent à l'ensemble le caractère d'une foi. ». *Mon combat*, tr. J. Gaudefroy-Demombynes et A. Calmettep, Nouvelles Éditions Latines, 1934 ; éd. La Bibliothèque électronique du Québec, p. 154. 『わが闘争』平野一郎・将積茂訳、角川文庫、改版、2016 年、下巻、117 頁。

[35] *La Déclosion*, *op. cit*., p. 77. 『脱閉域』、前掲書、98 頁。たとえ「神の本性よりもいっそう人間のわざ［les œuvres de l'homme］に関係している、信の本質的な点」（*ibid*., p. 73 : 同書、93 頁）が問題であっ

『文学的絶対』における初期ドイツ・ロマン主義の読解において「作品 ergon, opus, œuvre」がどのように分析されていたかを確認する余裕もここにはない。少なくとも完成態としての作品概念の批判を経て、現動態にある働き／行為としてそれらが賦活されていることを確認しておくにとどめよう。

では現実化の論理から解放され、そこから帰結する危険を回避できたとして、今日、信に何が残っているのか。誠実さをめぐるフレーズに戻ろう。「私たちは何に対して誠実なのか？［……］誠実さの身振りそのものに誠実なのです」。グラネルと共に、ナンシーはこの身振りを「信」と呼んでいた。

> 知によっても、意識の確実性によっても測定されないこの身振り、対象化するのでも主体化するのでもない身振り、あるエクリチュール（歌、調子、タッチ）と必然的に共犯関係にある身振り、それを「信」と呼ぶことができるのではないか。そう呼ばなければならないのではないだろうか。留保なき無神論に平然としてかかずらわっているような信、その中では信が「不気味・奇怪なもの」を言うために援用される「勇気」以外の何ものでもなくなるような無神論に関わっている信。[36]

だが、どうして変わらずグラネルが共にいるのだろうか。ナンシーが、こう言ってよければ「反‐現実化」の論理を呈示するのが、グラネルの遺した未完のテクストを注釈するまさにその時だからだ。

> 決して現動態になく、とはいっても予め形成されたモデルのように潜勢態や、待機状態、潜在（ヴァーチャル）状態にもなく。［……］「行為への移行」は潜勢力が現実化することではなく、ある呼びかけへの応答、静寂の内に響き渡るテクストなのだ。[37]

ても、このわざ＝営為はブランショ的な「無為 désœuvrement」に関連していることは注意するべきだろう。「信は営為の中で、営為として生じる無為である」（*ibid*., p. 77：同書、99 頁）。営為の内で抵抗している力である無為は「確信」とも呼ばれる。「現動態にあって、「理解できないもの」に身を委ねるのですらなく［……］もう一つ別の行為であるもの、すなわち命令に身を委ねる「確信」」（*ibid*., p. 79：同書、102 頁）。

[36] *La Déclosion*, *op. cit*., p. 104. 『脱閉域』、前掲書、137 頁。ときに歌や朗唱や叫びといった素材に与りつつ、ナンシーはその危険についても注意を喚起していた。「カトリックであれプロテスタントであれ［……］キリスト教は「長広舌 harangue」へと引きずり込む。［……］音楽もまた危険なものなのではないですか？」。« En chute libre à l'infini », *art. cit*., p. 139. 「キルケゴール」、前掲論文、21 頁。

[37] Jean-Luc Nancy, « Ni le voir ni l'avoir », Paul Audi et al., *L'Archi-politique de Gérard Granel*, T.E.R., 2013, p. 260. グラネル追悼のために読まれたこの美しいテクストについては、2022 年 1 月現在、元になった発表の音声がカーン大学のサイトで公開されている（https://www.unicaen.fr/recherche/mrsh/forge/800）。引用にあるように、応答・差し向け（アドレス）・言葉は必ずしも音響的なものとは限らない。言語に対する先行性に立ち戻る必要があろう――「いかように言語を発することにも先立つ（が、言語に最初の可能性の条

4. 身振りという語、語を放つ身振り

グラネルの身振り、受け継ぐナンシー――身振りを受け継ぐという身振り？――だがなぜ、かくも「身振り」という語に注目しているのか。おそらくは身振りは脱構築の核心にあるからだ。脱構築**そのもの**とは言わないにしても（「現動態・行為の状態にある脱構築 une déconstruction *en acte*」というべきかもしれないが、しかし反対に、行為の状態にない脱構築というものがありうるのだろうか）。

> 脱構築の身振りとは、批判的でも永続化に寄与するのでもない身振りとして、またフッサールやヘーゲル、カントにもみられない歴史と伝統への関係について証言する身振りとして、まさしくキリスト教内部においてのみ可能であり、たとえそれが意図的にこの内部から発して自己を定式化するのではないとしても、そうなのです。[38]

脱構築の身振りは**純化された**形[39]、すなわち身振りという姿で信を暴露し出現させる。繰り返すが、誠実さへの誠実さ、絶対的なものへの絶対的関係のことである。あるいはおのれを退引させることを望むものへの関係、穿たれ窪みとなり、退引せる状態にあろうと欲するものへの関係だ[40]。「窪み le creux」と「退引 le retrait」、グラネルとナンシーそれぞれの、ときに混ざりあったモティーフ。言い換えれば、我々は内実を抉り取られた信を、穿たれたもの、退引したものを前にした信と関わっている。ナンシーはそれを「空虚になった神と神的な空虚の場、窪み」と呼んでいる[41]。この一節は同じ主題を扱った他のテクストを思わせるが、わずかばかり引くにとどめよう。

> 独りでいるのではないこと、このことは神的である［……］[42]

共同体、死、愛、自由、特異性は、それらが「神的なもの」に取って代わるという点で、「神

件を与える）、特異性相互の呼び止め」。Cf. Jean-Luc Nancy, *La communauté désœuvrée*, Christian Bourgois, 1986, p. 73. 『無為の共同体』西谷修・安原伸一朗訳、以文社、2001 年、53 頁。また「行為への移行 le passage à l'acte」が精神分析において有する危機的な重要性を指摘してくれた Venedetta Todaro に感謝する。ここにはたしかに、見かけ以上にナンシーとラカンを引き寄せる争点があろう。

[38] *La Déclosion*, *op. cit.*, p. 215-216. 『脱閉域』、前掲書、294 頁。身振りという語はテクスト上で脱構築に言及される際、しばしば現れる。一例として「脱構築の身振り」（« le geste de déconstruction », *ibid.*, p. 210 : 同書、287 頁）、および「脱構築する身振り」（« le geste déconstructeur », *ibid.*, p. 220 : 同書、299 頁）。

[39] ただし起源への回帰という意味ではなく（*ibid.*, p. 84 : 同書、110 頁）。

[40] *La déclosion*, *op. cit.*, p. 91. 『脱閉域』、前掲書、118 頁。

[41] *La déclosion*, *op. cit.*, p. 104. 『脱閉域』、前掲書、136 頁。

[42] Jean-Luc Nancy, *Des lieux divins*, T.E.R., 1987, p. 42. 『神的な様々の場』大西雅一郎訳、松籟社、2001、95 頁；ちくま学芸文庫、2008 年、105 頁。T.E.R（= Trans-Europ-Repress）はグラネルが 2000 年に創設した出版社／アソシエーションで、ナンシーがこの主題を扱った論考を単行本として TER から刊行したのにも、二人の関係に支えられた面があったのだろう。

的なもの」の名でもある［……］[43]

結局、「神的なものから残っているもの」[44]が、さらには「神的なものの内、神的なままにとどまっているもの」が問題なのだ。だがどうしてそれを「神的」と呼び、穿たれたままに残っているものを前にした身振りを「信」と呼ぶ必要があるのか。退引の後の「とどまり・残余 le reste」とはどのようなものなのだろうか[45]。とりわけ我々、あるいは結局のところ＝終わりに至っている *en*-fin 私にとって、神（々）の記憶のない私にとって。ブッダの記憶と共にあり共にない不‐仏教者としての私、ここまで辿ってきた信の記憶、信の退引をおそらくは共有していない私にとって[46]。

---

[43] *La communauté désœuvrée*, *op. cit*., p. 33. 『無為の共同体』、前掲書、21 頁。「最終的には、「神的なもの」については今後もはや語ってはならないのだろう」と記した後も、「キリスト教の脱構築」をめぐって語り直しが止むことはなかった、と言えるだろうか。また以下をも参照。Jean-Luc Nancy, *Être singulier pluriel*, Galilée, 1996, p. 36. 『複数にして単数の存在』加藤恵介訳、松籟社、2005 年、53 頁。その少し前に簡潔ながら acte をめぐる記述がある（*ibid*., p. 35：同書、52 頁）。

[44] *La déclosion*, *op. cit*., p. 104. 『脱閉域』、前掲書、136 頁。

[45] 西洋にとっての他者、少なくとも小文字で書かれる一人の他者にとって、一体「どこ」から信はやって来るのか。「この信（「説得 persuasion」、「信頼の担保 gage de confiance」あるいは「誠実さの請け合い assurance de fidélité」）は他なるものに由来するはずである。外からやって来るのでなければならず、内部への通路を自らに開く外部である」（Jean-Luc Nancy, « Le judéo-chrétien », Joseph Cohen et Raphael Zagury-Orly (dir.), *Judéités. Questions pour Jacques Derrida*, Galilée, 2003, p. 315）。「ユダヤ‐キリスト教的なもの」の初出時にみられるこの箇所は『脱閉域』再録時に欠落している（該当箇所は *La Déclosion*, *op. cit*., p. 80：前掲書、103 頁）。欠落について念の為ナンシー本人に問い合わせたところ、意図的なものではなく理由は不明とのことであった。別の論集に再々録された際には復元されている（Jean-Luc Nancy, *Derrida, suppléments*, Galilée, 2019, p. 77）。

一見すると、ここには他なるもの、あるいは外部をめぐる矛盾がないだろうか。「ゆえに脱構築は構築にとっての法ないし固有の図式として、構築に属している。脱構築は他の場所から構築に不意に訪れるのではない」（*La déclosion*, *op. cit*., p. 68. 『脱閉域』、前掲書、86 頁）。先に引いた箇所（注 38）でも同様のことが述べられていた。他なるもののもたらすトラウマ的遭遇によって開始される脱構築は存在しないことになるのだろうか。この問いは脱構築と体系構築の関係を主題として立て直す必要がある。哲学体系といわば骨の髄まで結びついたキリスト教との距離をいかに取りうるのか、先に触れた初期の仕事までを視野に収めた分析が要求される（本稿、第 2 節）。言い換えれば、「一度はキリスト教という現象をひとまとめにして［en bloc］把握する覚悟を決めねばならない」と、「重要なのは、否定するためであれ確認するためであれ、キリスト教的接合をひとまとめに［en bloc］扱わないことです」という、一見相反する二つの言明を慎重に検討しなければならない（« Catéchisme de persévérance », *art. cit*., p. 372 ; *La déclosion*, *op. cit*., p. 216：『脱閉域』、前掲書、294 頁）。

[46] デリダの無神論をめぐる定式については以下の拙論で触れた。「人間（オム）なきオマージュ」、『多様体』月曜社、第 2 号、2020 年 10 月、109 頁。ここでは無‐無神論者 a-athéiste ではなく不‐仏教者 b-bouddhiste と口籠っておくべきなのだろうか。表面上は前者のように、仏教文化圏と呼ばれる地域に暮らす信仰心の無い者は口籠る。あるいは「念仏」と呼ばれるものをときにブツブツと唱える。「念仏」という語は語源的には、「ブッダを思考する」、あるいは「ブッダのことを思い浮かべる」などを意味する buddha-anusmṛti / buddha-manasikāra という表現に由来する。あまりに人口に膾炙し、摩耗することによって「アブラカダブラ」を連想させなくもない念仏の擬音語は、何も言わず、何も言わないことによって無のざわめきを表すこともありうるだろうか。何でもないもの、無 rien がいかに重要であったか、もう一つ

少なくとも、信は言語に残る。今日でも「私はあなたを信じる J'ai foi en toi」と言うことはできよう。もはや何の記憶もまとってはおらず、ありきたりの表現、紋切り型にすぎないのかもしれない。だがナンシーが捧げられる情熱をもってそうしていたように、「崇拝する＝大好き J'adore !」と口にすることもまたありきたりの形式をとっている。凡庸でないもの、特異＝奇妙なものは凡庸さの内に生ずる。無限が有限の内に、世界の外が世界の中に開かれるように。

たとえ眼前で崩壊していくように見えたとしても、この世界の内に、そう、行為の内に、ひとたび une fois 投げ入れられて――たった一度 une fois pour toutes ではなく、何度でも plus d'une fois――、信は残る。それが思考の謂だ。行為に信を置く／現動態の信を持つ avoir une foi en acte という、この身振りが絶えることは決してない。

の（思いがけぬ機会に迫られての）オマージュではそのことに接近しようと努めた。Ryosuke Kakinami, « Rien que rien », *Philosophy World Democracy*, 27 september 2021. https://www.philosophy-world-democracy.org/grace/rien-que-rien-en-guise-dhommage-a-jean-luc-nancy